

# OAG ドイツ東洋文化研究協会の歴史と 在日ドイツ人の日本観

Die Geschichte der OAG und das Japanbild der Deutschen in Japan

サーラ・スヴェン

上智大学 国際教養学部 準教授

OAG ドイツ東洋文化研究協会副会長

Sven Saaler, Associate Professor, Sophia University

Stellv. Vorsitzender der OAG

奈良県立図書情報

2009年3月22日

記念講演会

Vortrag in der Präfekturbibliothek Nara

Gehalten am 22. März 2009

2007年以來、私ども、OAGドイツ東洋文化研究協会 (Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens) は、奈良県立図書館のご協力を頂き、今年3回目の展示会を開くことが出来、とても幸いなことと存じます。「西洋人の日本観 - 日本に関する本のさまざま」という展示、そしてシーボルト図書コレクションの展示に続きまして、今年は私どもOAGという協会の業績を紹介したく、展示会を開かせていただきました。この展示会を開くにあたって奈良県立図書館間の皆様には大変お世話になり、多くのご協力を頂き、心から御礼申し上げます。

この展示会をご覧になれる方で、OAGのことを初めて聞く方も大勢いると思いますので、今日の公演では、OAGの歴史、とりわけ日独関係におけるOAGの役割、そしてOAGの会員を中心として、在日ドイツ人の日本観について、お話をさせていただきたいと思います。時間の関係もありますので、今日は主に明治・大正期に話をしぼりたいと思います。その日本観を探るには、OAGの出版物、とりわけOAGの定期刊行物であった『OAG会報』(Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens)、略してMOAGという研究紀要の内容を分析・紹介もしたいと思っております。

しかし、在日ドイツ人の日本観を考える前に、まずその在日ドイツ人の発展、その数と、そのドイツ人の社会的・政治的背景を考える必要があります。

## 在日ドイツ人 — その数と役割

ドイツ人が「ドイツ人」として日本に来たのは、1861年のプロイセン王国と日本との間で結ばれた条約のあとのことでもあります。ここで正式な日独関係が始まるといっても良いと考えています。江戸時代に日本に来た有名なケンペルやシーボルトなどは、オランダの東インド会社の要人として来日していたため、きょうの話では除外しておきたいと思います。

プロイセン王国から1860年に、Eulenburg使節団が日本に派遣され、ドイツ関税同盟やハンブルグ、ブレーメンというハンザ都市など合計約40のドイツ諸邦と日本との間に条約を結ぶことを目的とし、日本にきました。このEulenburg使節団はいうまでもなく、ドイツからの「黒船」というような、あまり平和的ではない使節団でありました。武力をもって圧力をかけ、条約締結を幕府に求めました。



図1:オイレンブルグ使節団の主艦「アルコーナ」号



それはともかく、1860年代の在日ドイツ人の数は非常に少なかったのです。1863年の在日ドイツ人の数は30人前後程度で、1879年にも約160人とどまりました。<sup>2</sup> 1898年にようやく400人にのぼり、第一次世界大戦の勃発の時点までに、約1000人まで増えました。この数は全体的に少ないように見えますが、イギリスとアメリカに続いて、3番目に多い数字であり、フランスと大体同レベルの「人数」でありました。たとえば、横浜居留地では、1893の時点でイギリス人は808人、アメリカ人は253人、ドイツ人は151人、フランス人は132人でした。<sup>3</sup>

このドイツ人の中では、まず商人と学者が多く、商人は様々な背景がありましたが、学者は主に日本政府に雇われた、いわゆるお雇い外国人でした。そのなかには、現在までも、とりわけ日本でよく知られている医者の Erwin Baelz、歴史学者の Ludwig Riess、軍人顧問の Jacob Meckel、憲法縛者の Roesler などがいました。その全員が O A G の会員でもあり、O A G の研究誌 M O A G にも論文を投稿したのであります。

---

<sup>2</sup> Ibid.

<sup>3</sup> 横浜開港資料館編『横浜外国人居留地』有隣堂、1998年、31頁。

## 〇 A Gの創立と在日ドイツ人

〇 A Gは 1873 年に創立され、現在まで日本の社団法人として存続し、日本でもっとも古い社団法人の一つであるということになります。厳密にいうと、社団法人になったのは、1904 年ですが、それにしても、その後の日独関係の多様な歴史的背景を考えると、〇 A Gが 1914 年の日独戦争、1930 年代前半の相互不信、そして第二次世界大戦における敗戦による「縁切り」という歴史の中で、存続し続けたことは、非常に興味深い結果であると思われます。

136 年前に〇 A Gが創立されたとき、その創立の呼びかけ人になったのが、当時在日ドイツ弁理公使の **Max von Brandt** でありました。創立日はドイツ帝国で様々な祝いに利用されていた「皇帝の誕生日」の 3 月 22 日でした。創立時、71 人の商人と学者が〇 A Gの創立会員になり、すでに横浜に存在していた **Klub Germania** というドイツ人倶楽部と、神戸に存在していた **Klub Concordia** に続き、在日ドイツ人の 3 番目の組織となりました。しかし、**Germania** や **Concordia** とは違って、〇 A Gは社交的な役割よりも、主に学術的な役割を果たしていました。インターネットのない時代という状態は、現代人にはもう理解しがたいでしょうが、この時代では情報が非常に手に入りやすく、もちろんテレビもなく、ドイツの新聞などでさえ、手に入りませんでした。なお、日本についての情報も、ドイツ語や英語で簡単に知ることができませんでした。そのような状況のなかで、学者が情報交換をするために、そしてその日本に関する研究を商人などに伝達し、ドイツ本国にも珍しい日本に関する情報を伝達するために、1873 年に〇 A Gが創立されました。

商人が日本に来た理由はもちろん、まずお金をもうけることでありましたが、特に明治初期において、教育レベルの高い商人しか日本までこられなかったといわれているため、商売だけではなく、日本の文化に関心をもった人たちも少なくありませんでした。そして商人はもちろん、日本における商売に役立つ情報も求めていました。そこで、商人がお金を寄付し、OAGの運営を助成し、在日ドイツ学者との情報交換と意見交換を推進したのでした。

しかし、OAGの創立には、もう一つの背景がありました。それは、ドイツとイギリスの世界的な競争でした。OAG創立の1年前に、イギリス人を中心にした *Asiatic Society of Japan* が創立されました。在日ドイツ弁理公使の *Von Brandt* がイギリスによる、横浜の外国人居留地の実質的な「支配」を嫌がって、イギリスに対抗しドイツの学術的な「偉大さ」を誇示するためにも、OAGの創立を呼びかけたことは、明らかであります。とはいえ、その後のOAGと *Asiatic Society* の関係は非常に良好で、緊密でありました。一時的に、*Asiatic Society* の事務所が、OAGの敷地内にあり、*Asiatic Society* の中心的な人物であった *Ernest Satow* と *Basil Hall Chamberlain* が同時にOAGの会員になったこともありました。

## 〇 A G の出版物にみる在日ドイツ人の日本観：明治初期・中期（1873～1900）

〇 A G は、日本に関する知識・研究成果を在日ドイツ人とドイツ本国に伝達するために、どのような活動を遂行したかという点、まず講演会と研究誌の刊行がその活動の中心でした。研究誌として、ドイツのみならず、全世界において注目されていた『〇 A G 会報』(Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens)、略して M O A G は、1873 年から刊行されました。世界中の大学はこの研究誌を購読し、その発行部数は、500 にものぼりました。現在でも、総合雑誌が相次いで、廃刊になり、発行部数が数百にとどまる総合雑誌があるという状態を考えると、1870 年代に 500 という部数の学術的雑誌は大きな成功であったといってもいいでしょう。

1873 年～1875 年までの第一巻は、第一号から第十号で構成されていて、その 10 冊は合計約 420 ページに及び、実に様々な分野がカバーされていて、日本に関してあらゆる研究成果・知識を社会に伝達しました。そこでは、〇 A G という会のもともとの名称にもあるように、文化のみならず、自然科学と文化人類学 (Natur- und Völkerkunde) が全体的にカバーされていました。

最初の号では、たとえば、Erwin Knipping による「江戸気象ステーション記録に基づく気象学的観察」や Kempermann という在日ドイツ公使館通訳官による「家康の諸法」のドイツ語訳そして阿蘇山の噴火に関する情報を含む論文が掲載されていました。全体として、自然科学、すなわち気象学、医学、地理学、生物学などの分野が強いですが、日本の文化、例えば、和紙の製造について、日本の歌、物語と祭りについて、神道について、お茶について、囲碁や、将棋（「日

本のチェス」)などのゲームについて、そして奈良の遺跡に関する論文もMOAGの第一巻(1873年から1875年)に、掲載されています。<sup>4</sup>

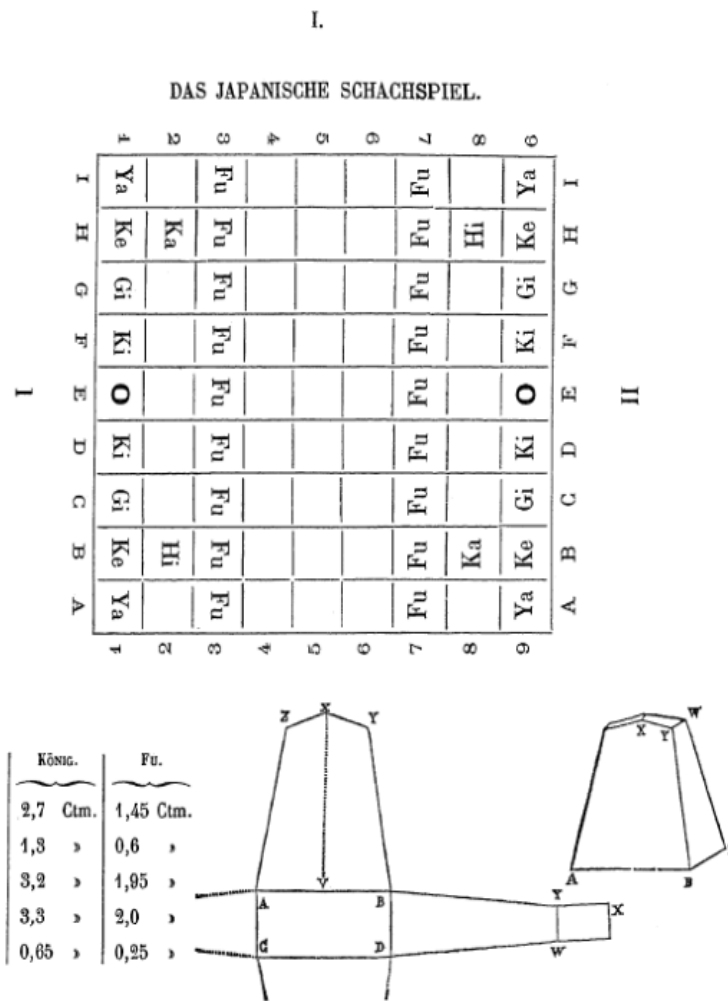


図3 : 「日本のチェス」の紹介

第一巻の第六号には、日本の音楽について、詳しい論文が掲載され、スケッチ付で、日本の音楽と日本における洋風音楽の導入について論じられています。

<sup>4</sup> 詳しくは、検索可能なOAGデジタル・ライブラリーをご覧ください：  
<http://www.oag.jp/bibliothek/digitale-bibliothek/>

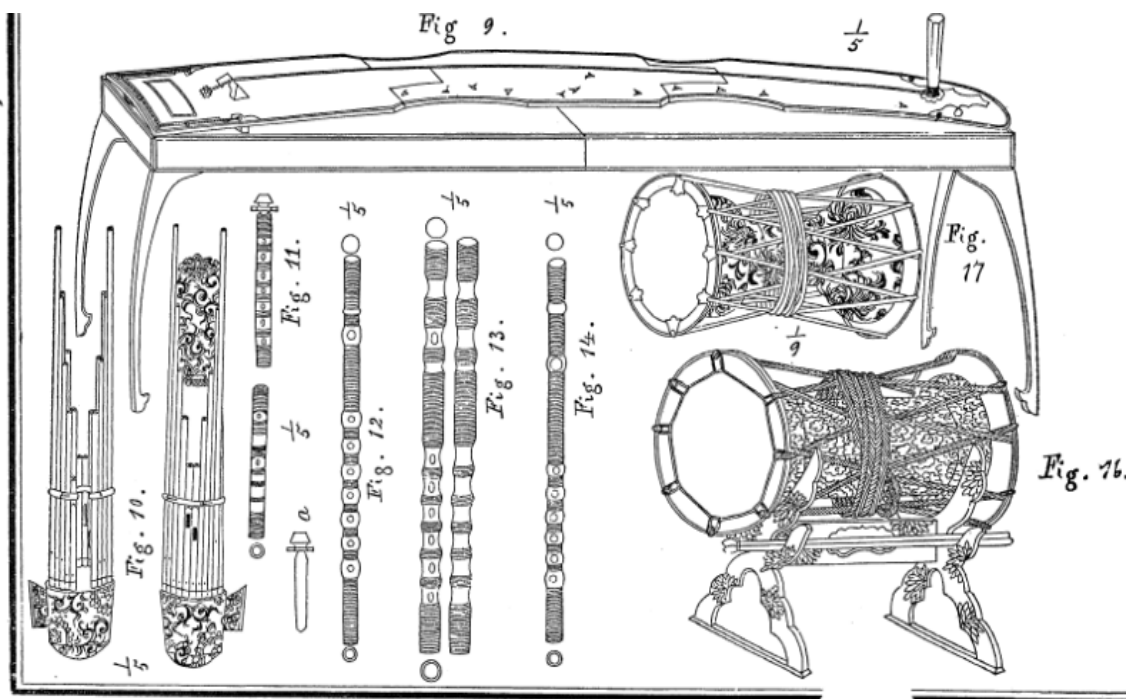


図 4 : 日本の楽器の紹介

なお、蝦夷の島（北海道）とその「原住民」のアイヌについても大きな関心が寄せられていたことが目立ちます。会員の Dönitz 教授や、ベルツ医師もアイヌの体型について論文を掲載し、詳しく論じています。

# AINO - SCHAEDEL.

E. BAER.—DIE KOERPERLICHEN EIGENSCHAFTEN DER JAPANER.

BD. III. TAFEL IV.

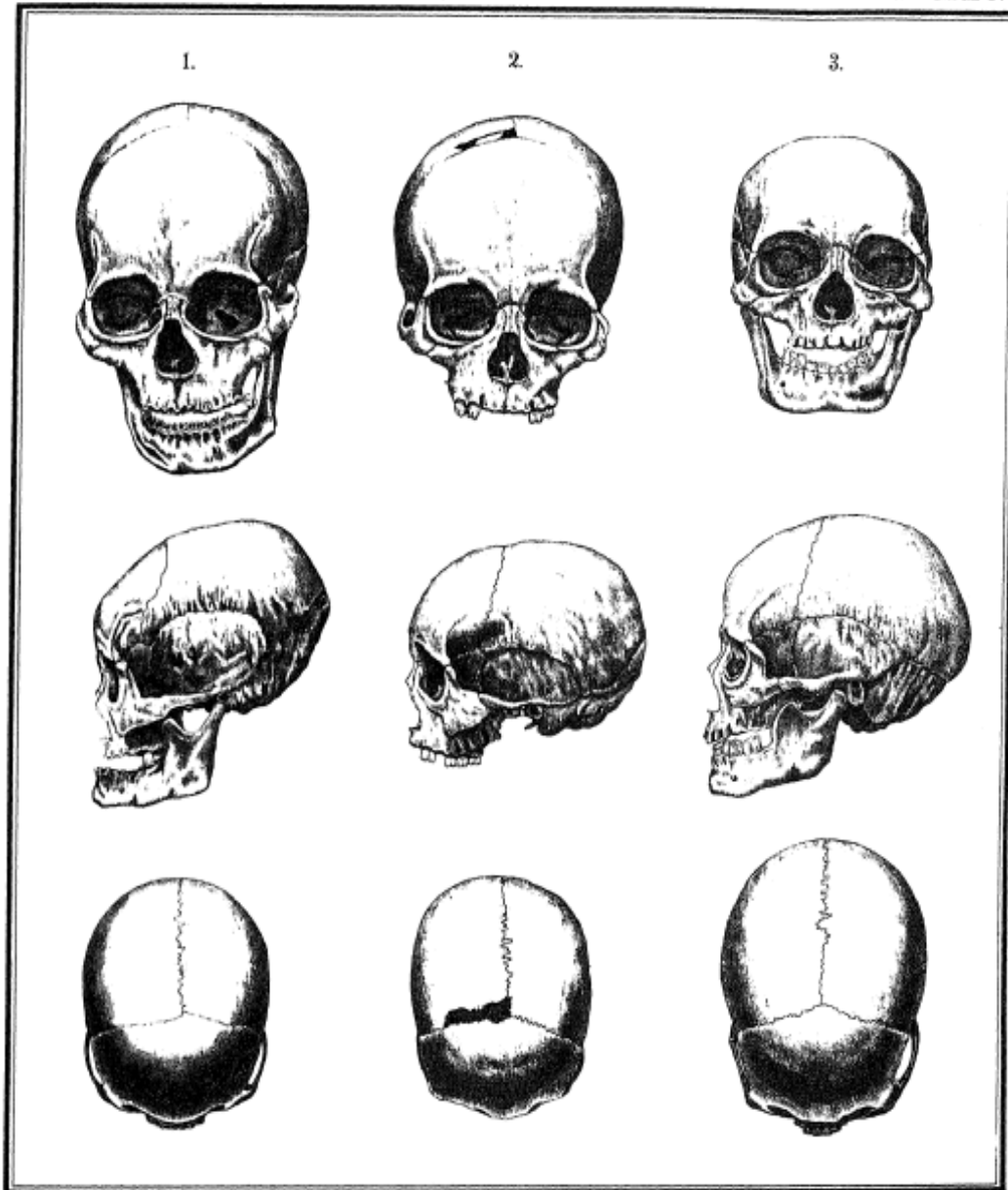
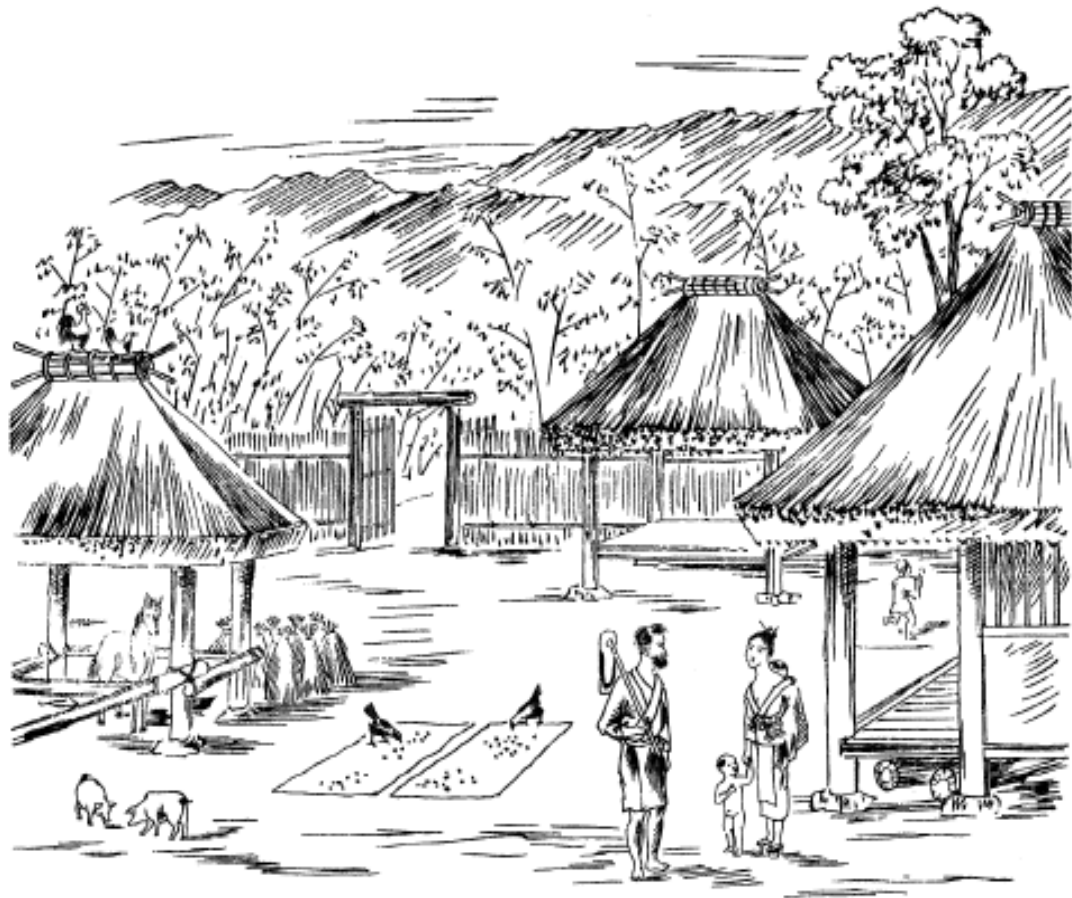


図5：アイヌの体型を分析するベルツの論文

このような文化人類学、医学と生物学の境界線に位置する研究とは、当然、当時のヨーロッパの帝国主義の世界への科学的関心の結果でありました。世界をますます植民地化したヨーロッパ列強から世界に出た科学者はアイヌのような、

いわゆる「土人」「原住民」、すなわちその文化と生活習慣、まだ「近代」の影響を受けていない民族を積極的に探し、自分自身の研究対象にしようとしていた。この探索は、もちろんヨーロッパ列強の帝国主義の、アフリカ・アメリカ・アジアの民族に対する優越感の結果でもありましたが、いわゆる「近代」に対する疑問の結果でもあると考えられます。つまり、ヨーロッパの近代を疑問視し、別の近代、それとも近代のオルタナティブを探したり、前近代的生活を送っている民族を研究するヨーロッパ学者は19世紀で徐々に増え、それは結局ヨーロッパ文明に対する悲観的な疑問、そして第一次世界大戦当時、Oswald Spenglerの「西洋の没落」という絶望的な本（Kulturpessimismusの表現である本）につながっていくといわれています。まだほとんど日本に統合されていない北海道に住んでいたアイヌは、ヨーロッパの多くの学者にとって、人気のある研究テーマになっていたようであります。しかし、アイヌのみならず、南の奄美大島などでも、OAGの会員が調査しに行き、その調査の結果をMOAGで発表しました。



*Mittheilungen der Deutschen Gesellschaft Ostasiens.*

図6：奄美大島を紹介する論文

奈良で講演するにあたって、まず1875年にMOAGに所収されている「Nara」という論文を紹介するべきだと思います。<sup>5</sup>著者はCochiusという学者で、かれは8月に京都と奈良に旅行をする機会が与えられ、この論文はその旅行の感想文に当たります。これがなぜ雑誌に掲載されたのかというと、当時のいわゆる「不平等条約」によって、在日外国人たちは、条約で定められた港とその周辺（大抵の場合、約50～70キロの半径）しか自由行動できず、内陸への旅は原則とし

<sup>5</sup> Dr. H. Cochius: Nara. In: *Mittheilungen der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* (以下MOAG), Band 1, 1873-1876, 1. Heft, S. 22-23.

て禁止されていました。奈良ももちろん神戸居留地から遠くて、外国人は原則として立ち入り禁止でした。

ただし、一部の学者と外交官たちだけが、時として政府か県知事に許可を得て、内陸の見学も許されたわけではありますが、1875年の時点ではこれはまだ非常に珍しいことでありました。

日本側が外国人の内陸への進出を嫌がったのは、貿易上に不利が生じるからでもあり、そして外国人への暴力、すなわち明治初期まで続く「攘夷運動」による外国人暗殺、外国人に対するテロを恐れたからでした。しかし文化的な配慮もありました。とりわけ、京都と奈良という「天皇家の聖地」に外国人が立ち入るとこの聖地が汚されるという考え方が、天皇が最上位に立つ「国家神道」を国教として強化し、仏教をむしろ追放しようと思った初期明治政府において、非常に強いものでした。

初めて外国人が京都へのアクセスを定期的に出来るようになったのは、1871年から毎年京都に開催された「国内博覧会」の後のことでした。さらに、1877年の京都大阪間の鉄道の開通に当たって、京都は神戸外国人居留地の在日外国人にとってさらにアクセスしやすくなり、その後京都を訪ねた外国人の数が増え、その鉄道開通に当たって、日本政府は東京にいる諸外国の外交官たちを京都に呼び式典をあげました。

京都を訪ねた外交官は、同時に京都を観光し、当時の京都の様子を伝える写真を数多くのこしています。当時、ドイツ公使そして同時にOAG会長も務めた

Carl von Eisendecker<sup>6</sup>はドイツ外務省への手紙でこの式典について、非常に良い印象をドイツの外務大臣宛ての報告書で伝えています。

先月 15 日（報告書 14 号）にご報告させて頂きましたように、天皇陛下は、京都での鉄道開通記念祝典に各国の公使を招待され、政府の汽船を御用立てられました。

東京よりの出立は、今月 1 日、不調を理由に当日、出席を辞退したオランダ及びベルギー弁理公使を除いた全公使が乗船致しました。やや荒れた海での船旅の後、私共一行は、3 日の朝に神戸（兵庫）に到着致しますと、そのまま京都に向かいました。

当地は、ある古寺の境内に、公使及び通訳、それぞれに、宿泊場所が特設されていた場所でございます。

食事は、皇室のほうで全て用意されました。

他の公使と共に、私は、祝典閉会後に命を受け、天皇に拝辞すべく、皇室用馬車にて御所に赴きました。

皇后もその拝辞・謁見の席に同席しておられました。天皇並びに皇后は、条約国の公使に祝典への出席に対する謝辞を述べられ、一行を代表して首席外交官ハリー・パークス卿が両陛下に、同様に御礼の言葉を幾つか申し上げたのち、私共は辞去致しました。

同夜、私共が招待預かりました大晩餐会には、天皇の代理として、有栖川宮がお見えになり、ハリー・パークス卿の、天皇陛下のご健勝を祈念する乾杯の辞に応えられ、条約国君主並びに元首に乾杯の辞を述べられました。

祝典後の数日は、公式訪問にあてられました。

9 日の早朝、他の公使と共に、再び神戸で乗船し、昨晚、横浜に到着致しました。

閣下、最後に、謹んで以下のことを申し上げさせていただきます。祝典は終始、日本にしては実に厳かに、又、趣味良く執り行われ、開通祝典当日のみならず、外国人客の宿泊から待遇に及ぶ一切の手配が、驚くべき入念さと深い思慮をもって執られておりました。特に、一般民衆の来場、その、道に駅にと集まった何千もの観衆の間で、何の暴力沙汰も妨害行為も起こらなかったことが、何より印象的でございます。

---

<sup>6</sup> Eisendeckerについて Peter Pantzer und Sven Saaler: *Japanische Impressionen eines Kaiserlichen Gesandten. Karl von Eisendecker im Japan der Meiji-Zeit!* 明治初期の日。ドイツ外交官アイゼンデッカー公使の写真帖より, Munich: Iudicium, 2007 を参照。

やや長い引用ですが、ここで当時の在日ドイツ人、OAGの関係者の日本観について、何点か読み取ることが出来ます。まず、日本政府はやはり外国における、とりわけ外国政府の代理である外交官の「日本イメージ」を非常に気にしていたため、まさに「イメージ政策」を積極的に務めたのであります。良い待遇を与え、特別な宿泊を用意し、皇族の親王たちを付き合わせることで、外国人外交官の親近感、信頼を助長しようと思っていたようです。そして、これにはわけがありました。つまり、先の引用で明らかになるように、Eisendecher とそのほかの外交官たちは、1877年ですえ日本国内の反乱、そして外国人に対する暴力を恐れています。すなわち、Eisendecher は祝典に際し日本民衆の良い態度、その冷静さと秩序を評価し、それをわざわざドイツの外務大臣宛ての報告書で述べる価値があると思っていたようです。

1877年には攘夷運動が組織的にはもはや存在していないとはいえ、西南戦争で明らかになっていたように、そのときでも外国人の影響をむしろ排除したい勢力は根強く残っており、そしてそのように外国人、外交官は認識しており、相変わらず自分の身の安全を気にしていたようであります。

ではOAGの出版物にもどりましょう。Eisendecher の京都訪問より4年前にCochius というOAGの会員が奈良を訪問しましたが、その論文から非常に好意的なイメージが伝わり、奈良について非常にポジティブなイメージが浮かんできます。Cochius の論文ではまず、奈良という「古都」の重要性がその神道と仏教のお寺、神社にある、と強調されています。Cochius は京都から奈良に入り、その途中のきれいな景色を細かく説明しています。

8 月半ばに、私は京都（ミヤコ）から奈良という古都を訪問しました。その奈良は今でも、巡業の目的地として、日本で特別な重要性をもっている。

（省略）

淀川の右の岸辺（省略）から広汎で起伏のある景色が見え、その景色は綺麗な山に囲まれている。東側では川の向こうに宇治という、お茶の生産地が見え、そこでは日本の最高なお茶が生産されている。（省略）

この風景は、[イタリアの]ザビーナ山脈の南西を思い出させたのである。

（省略）

この地域には清潔な木造の家の村と郷が数多くあり、見当たる人々のしっかりした体型と健康な外見をみると、農民は農業によって、困らない生活ができることがわかります。（ただし）川には水があまりなく、殆ど川辺は石でいっぱいだった。春は水が豊富のため、高い防水ダムが造られている。

（省略）

現在の奈良の町は、あまり特別なところではない。その道は、他の日本の地方都市と同じく、東京（江戸）の貧困層が住んでいる地区に似ているが、その一方、1 千年以上の歴史を持つ寺院がよく目立ち、関心を呼びおこす存在である。そのなかで、三つの寺院が特に重要で、これは仏教の興福寺と東大寺と神道の春日神社である。

（省略）

町の外、興福寺の半マイル北側に東大寺という有名な寺がある。（省略）（お寺の中心的建物の）高い木の柱の間から、お寺の中の巨大な金箔つき鉄製の大仏がみえている。これは、日本の最も大きな神像である。（省略）この座像の高さは 16 メートル、顔の半径は 5 メートル、はなの穴の半径だけで 3 分の 1 メートル。（省略）このお寺の薄暗い雰囲気、この神像から与えられる崇高な安慰観、そしてその感動的な顔の表現はたしかに信仰深い者に与える影響は絶大だったに間違いない。美術品として、この仏像は私が知る限りで、もっともすぐれたものであり、鎌倉の大仏より、たしかに上品である。

詳細を説明する前に、もう一度先ほど紹介した **Eisendecker** 在日公使にもどりましょう。実は、**Eisendecker** はすでに 1862 年のプロイセンの使節団、まさにプロイセンの黒船に乗組員の一人として、日本に来たことがありましたが、当時彼は日本の風景をみて、母への手紙でこのように言及しています。

江戸の近郊は絵のように美しい風景です。美しい油彩画の題材にならないようなものは、ひとつもありません。人家が野原の至るところにあって、耕地の改良に非常に注意が払われています。穀類の畑はほとんどか全く見あたらず、その分、田んぼや野菜、キャベツなどが多いです。江戸市内の近くは起伏のある地形で、しょっちゅう坂を登ったり下りたりします。ときには江戸湾の絶景を見わたせ、ときには雪を戴いた山並みと聖なる山である富士山の眺めを楽しむことができます。風景が最高に美しく、すばらしい森のあるところでは、決まって近くに大きな寺院があります。こうした寺院が、大抵ひとつもわれわれの乗馬する際の目的地になっていました。小高いところに、大きな木の陰になるようにして建てられた寺院があり、それを取りまいて付属する建物や墓地があります。その美しさは、ほかにたとえようもありません。ヨーロッパ諸国の公使館は、こうした寺院の付属の建物が充てられていることが多く、私はイギリス公使の宿舎をスケッチしました。そこでは、とくに墓地が一見に値するものでした。

横浜の周辺の土地は大変美しいものです。どこもかしこも耕作され、家が建てられており、起伏に富んだ地形で、見事な森林もいくつかあります。森や田んぼ、茶畑、そして小さな村々等を通り抜けていく道中は、まことに興味深いものでした。そのすべてが、ドイツを思わせます。藁葺き屋根の家などはオルデンブルクの農家にそっくりで、ドイツと共通するものを非常に多く見かけたのです。

Cochius と同様に、1862年の若き Eisendecker も日本で見える風景を彼の出身地である Oldenburg の景色にたとえ (Cochius の場合はドイツ人が好んで行くイタリアの風景ですが)、それによってその美しさを強調し、親近感を表しています。19世紀に海外に行ったヨーロッパ人の文献でよく批判的に取り上げられているオリエンタリズムを、この在日ドイツ人の感想録、日記、報告で見るとはあまりありません。

日本の他者性よりも、むしろ日本が親しみやすい場所だということが強調されています。たしかに、当時のOldenburgの農家と日本の農家がたしかに似ていて、親近感を感じるのもおかしくないのですが、これこそは帝国主義的な思考であると強調する学者もいます。たしかに、New York, New Guinea, New South Wales

のような帝国主義の新発見地の「命名政策」は、親しみを表すものであるには間違いはないでしょうが、同時に「レトリックによる所有要求、正当化」であるという解釈も根拠がないとはいえないでしょう。<sup>7</sup>

ちなみに、奈良について新たにOAGの会報で短い報告が掲載されたのは、1911年になってからであります。1911年に「奈良の歴史と現代」というタイトルで、Hallierという学者が奈良の遺跡、その歴史と当時の状況を紹介しています。<sup>8</sup>Cochiusの奈良への旅行の報告書、感想文と違って、この20ページに及ぶ論文は奈良の歴史を詳しく紹介し、奈良を取り上げる小説、詩（たとえば、万葉集の詩、新古今集からの誌）なども紹介しています。まさに奈良の文化史のような論文であります。

当時日本に住んでいたドイツ人、外国人全体は、日本とアジア全体の文化のみならず、その風俗習慣についても大いに関心をもっていました。一部の在日外国人が日本の習慣を非常に楽しみ、「囲碁」をなったり「茶の湯」を習ったりしたようですが、日本、東アジアの悪習慣からも逃れることはなかったようです。当時アジア全体でかなり広がっていたアヘンの喫煙、アヘン中毒には、ドイツ人も無関係ではなかったようです。というのも、アヘン商売にかかわったドイツ商人もいて、アヘン戦争でイギリスの強固な態度を求めたこともありましたが、在日ドイツ人がアヘンを吸っていたことが、OAGの1875年の記事から推測出来ます。MOAGによると、1875年にMartin博士という人物は「アヘンの生産と利用」について報告し、その報告についての詳細なまとめがMOAGに掲載されています。

---

<sup>7</sup> Stumpp, Gabriele: Interkulturalität – Sprachgesten, Asymmetrien, Ambivalenzen. Textzeugnisse aus dem Umkreis der preußischen Expedition (1860-1861) nach Japan, in: *Zeitschrift für Germanistik*, N.F. 3, 2002, S. 516-522.

<sup>8</sup> E. Hallier: Nara in der Vergangenheit und Gegenwart. *MOAG*, Band 14, 1911-1913, Teil 1, S. 93-116.

この記事はとりわけ中国におけるアヘンの利用について説明していますが、MOAGのその次の号では、OAGの臨時会長のMüllerが、「前回の（アヘンについての）報告に続き、アヘンのパイプなどみせながら、アヘン喫煙術を説明した」、とあります。明白にアヘンを吸ったとは書いてありませんが、OAGの臨時会長がわざわざパイプを調達し、喫煙術を説明するというのは、その喫煙について会員は関心があり、試したがったものも少なくなかったと思うしかありません。当時、アヘンが厳しく規制されていたヨーロッパでは、なかなかチャンスがありませんが、遠い日本での、せめて外国人居留地では、アヘンが手に入りやすく試してみたい人も少なくなかったでしょう。臨時会長による追加説明では、アヘンの、割合に好意的なイメージも浮上し、アヘンの喫煙はそれほど害がない、という説明がなされています。<sup>9</sup>

（前回の）報告者は、その説明において、中国の熱狂的なアヘン批判者とキリスト教布教師の批判をまとめたのだが、（私の）中国人における、そしてアヘンに詳しい外国人における観察と調査によりますと、アヘンの悪作用（副作用）は全く誇張されている、という結論に至った。

これは、われわれのところ（ドイツで）、たばこ喫煙とアルコール飲用と同様に。たとえば、Tissot のこのことに関する本を読むと、ヨーロッパ人が、たばこ喫煙とアルコール乱用による害が大きく、（その結果）殆ど絶滅状態に近いところである、と思わせるものだ（が、これもとても誇張である）。

（省略）

実際のところ、中国の人口の1パーセントしかアヘンを吸わない。

なお、アヘンを消費するもので危ないのが、身体よりも、財布である。（省略）

そして、時間の無駄を考える必要がある。

たばこ喫煙者とアルコール飲用者は、それを楽しみながら、仕事ができるのに対して、アヘンは、おおむね横になりながら、吸われていて、その間、仕事が出来ない時間となってしまいます。

---

<sup>9</sup> MOAG, Band 8, Heft 8, S. 5-7; Heft 9, S. 1-4.

というふうに、アヘンの消費への批判が相対化され、アヘンはたばこやお酒より、はるかに体に害を与えるものではないと、強調されています。当時の在日ドイツ人の暇つぶしについて、少し考えさせられる議論であります。

## OAGの出版物にみる在日ドイツ人の日本観：明治後期・大正期（1900～1914）

明治時代におけるMOAGをみてみると、その記事の重点があきらかに、自然科学以外に、日本の伝統文化、芸術、音楽、文学、そして風俗習慣（日本のみならず、アイヌへの文化人類学的な関心も持続的にとりあげられています）にあったことは、先ほど説明しましたが、明治後期になると、OAGの出版物の内容で、変化が読み取れるようになります。すなわち、明治後期になると、時事的なテーマ、とりわけ政治・経済・社会をとりあげる論文の割合がOAGの会報において、徐々に大きくなってきました。

すでに、1900年代以前、日本の法律、貿易、経済に関する関心が増加し、以下のようなテーマがMOAGの紙面で取り上げられることになりました：

- ・ 法律学者のMayetの「日本の国債」を纏める論文<sup>10</sup>
- ・ 法律学者のRoeslerの「日本の貿易」を纏める論文<sup>11</sup>
- ・ 1918年にドイツ帝国首相になり、1880年代に法学者として日本でお雇い外国人として活躍していたMichaelisの日本の刑法・刑罰について<sup>12</sup>
- ・ Weipertという法学者による「日本の家族法」に関する論文<sup>13</sup>
- ・ Rudolfという裁判官による「近年の日本の法改正について」<sup>14</sup>
- ・ Crusenという学者の日本の刑務所に関する論文で、後の巣鴨プリズンが図説で紹介されています<sup>15</sup>
- ・ ドイツのお雇い外国人として、国歌の「Kimigayo」の作成にかかわっていたEckertの記事<sup>16</sup>

<sup>10</sup> Mittheilungen der OAG, Band 2, 1876-1880, 17. Heft, 273-299.

<sup>11</sup> Mittheilungen der OAG, Band 3, 1880-1884, 22. Heft, 35-44.

<sup>12</sup> Mittheilungen der OAG, Februar 1888/ 38.Heft.

<sup>13</sup> Mittheilungen der OAG, Band 5, 1889-1892, 43.Heft, 83-140.

<sup>14</sup> Mittheilungen der OAG, Band 5, 1889-1892, 45. Heft, 215-228.

<sup>15</sup> Mittheilungen der OAG, Band 9, 1902-1903, Teil 1, 17-56.

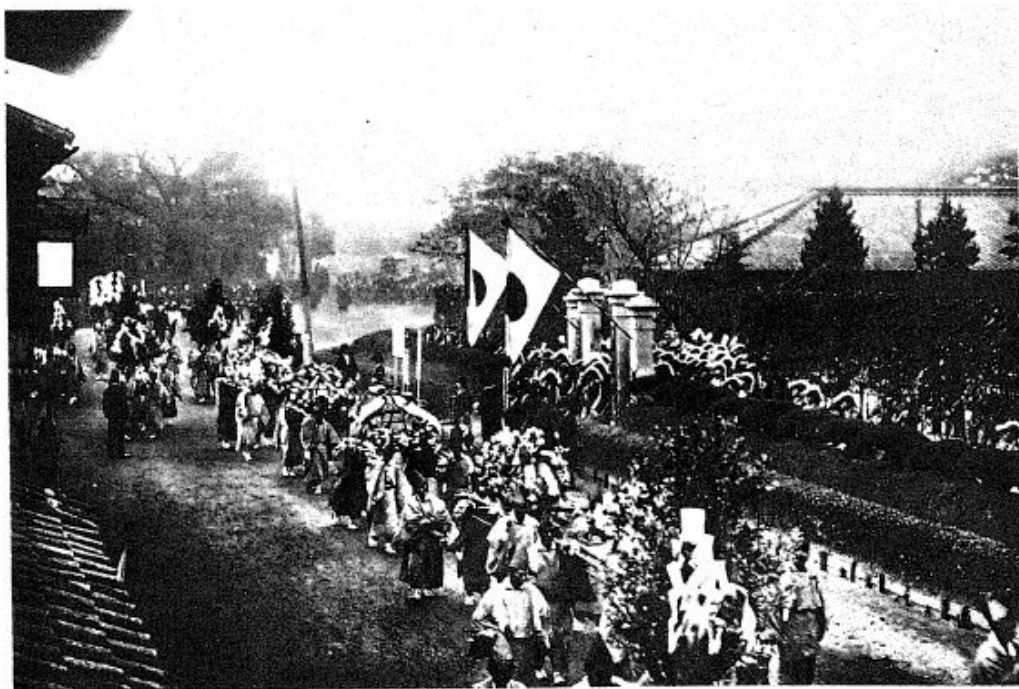
<sup>16</sup> Mittheilungen der OAG, Band 3, 1880-1884, 23. Heft, 131.

しかし 20 世紀に入ってから、時事的な記事が MOAG の紙面で占める割合はますます大きくなっていきます。これは、OAG の中で、世代交代が起こった結果とその世代交代による日本の認識における変化の結果でしょう。やはり、明治初期、中期の在日ドイツ人は、先ほど述べたように主にお雇い外国人であり、その制度は 19 世紀末に正式に終わり、一部の例外を除き、初期ドイツ人のお雇いがドイツに帰ることになりました。しかし様々な大学は相変わらず外国人教師を求め、新しく外国人を教授、教師として雇ったわけで、その結果新しいドイツ人が来日し、OAG にも入会し、MOAG に論文を投稿するようになります。

同時に、在日ドイツ人の日本認識が変化したのも明らかです。すなわち、明治初期と大正期の日本の国際関係における立場というものは、非常に違うものであり、世界においても、そして在日外国人によっても、違うふうに認識されていました。つまり明治初期の日本は、植民地にされる寸前の弱小国で、国際的に、そしておそらく在日ドイツ人によっても、2 等国、3 等国として認識されていたわけであります。その 2 等国、3 等国の政治、軍事、貿易などを研究しても仕方がない、という認識の結果として、むしろ帝国主義的な視点を取り入れ、文化と風俗習慣について研究がなされたと思われます。しかし 1914 年には日本が世界の大国の一つになっていたため、この大国の現状を調査する重要性、有利性が、在日外国人、ドイツ人によって認識されはじめました。そこで、新しく来日したドイツ人は（その数は 1914 年に 1000 人に達するが）、自然科学と伝統文化よりも、むしろ大国化した日本の時事的なことに関心があったようで、時事的なテーマに関する論文が MOAG で 1910 年以降さらに増えていきます。

1910年には、満州の経済状態に関する報告<sup>17</sup>、同年の満州の鉄道に関する報告<sup>18</sup>、北海道の農業などに関する長文報告<sup>19</sup>、日本人の海外植民に関する報告<sup>20</sup>、そして1910年の伊藤博文公爵暗殺、そしてその国葬について、写真付で詳しい報告がMOAGに掲載されています<sup>21</sup>。

### III



E. OHRT. — STAATSBEGRÄBNIS DES FÜRSTEN ITÖ.

図7：伊藤博文の国葬の写真

なお、日本とドイツの関係の歴史もすでに明治時代において、研究の対象となっていました。1910年に、歴史学者のOhrtは「1860年のプロイセン使節団」に

<sup>17</sup> Mitteilungen der OAG, Band 13, 1910-1911, Teil 1, 1-19.

<sup>18</sup> Mitteilungen der OAG, Band 13, 1910-1911, Teil 3, 157-180.

<sup>19</sup> Mitteilungen der OAG, Band 15, 1922, Teil A.

<sup>20</sup> Supplement der Mittheilungen der OAG Band 8 (1913).

<sup>21</sup> Mitteilungen der OAG, Band 13, 1910-1911, Teil 2, 123-156.

関する報告をし、その 40 ページに及ぶ原稿をMOAGに掲載し<sup>22</sup>、「日独関係の 50 年を振り返って、その 50 周年を記念し、その 2 国間関係の担い手たちを思い出させる」ことにしました。同様に、1911 年にベルリンから来日していたWitte という官僚により「中国におけるドイツの文化の影響」<sup>23</sup>について纏める報告がなされ、その原稿がMOAGに刊行されました。そのなかで、かれは日本とドイツの文化的関係にも触れていますが、驚くことに、かれはむしろ日本の「和魂洋才」的な考え方を評価し、日本による日本文化、日本宗教の防衛を高く評価しています。

この当時のMOAGの紙面における変化が偶然なものではなかったことが、1914 年号で明白になります。1914 年に、MOAGの編集方針も正式に変更され、1914 年号のMOAGは時事的なテーマを制度的に取り上げています。第一次世界大戦前の最後のMOAGの完全な号として刊行された 1914 年号の冒頭に、このように述べています：「今年はじめて、この会報に様々な分野における日本の発展を纏める報告を掲載することを試みました。(…)この時事的報告をこれからさらに増やすことを目指しています。」

この結果、1914 年号のMOAGが時事的な報告で、日本の政治、経済、社会問題などをとりあげています。日本の政治、貿易、郵船の発展、植民地の発展、財政と国債、国際条約と国内法制について、教育制度についての詳細な論文が掲載されています。文化も無視されたのではなく、現代演劇、宗教、哲学と仏教に関する調査なども見当たりますが、この第一次世界大戦前の最後のOAG会報では、明らかに時事的なテーマのほうが多くのページ数を占めています。

---

<sup>22</sup> Mitteilungen der OAG, Band 13, 1910-1911, Teil 3, 197-236.

<sup>23</sup> Deutscher Kultureinfluss in China. Mitteilungen der OAG, Band 14, 1911-1913, Teil 1, 73-92.

そのなかで、「内政」と「外交」と同じような文量で、桂太郎の他界に関して、報告されています。2ページにわたって、桂の職歴と歴史的意義が紹介され、1913年に「多くの人々に嫌悪され、ほとんど誰にも好かれなかった中、亡くなりました」、と述べられています<sup>24</sup>。この言及はいうまでもなく、当時、桂が護憲運動の敵であると広く知られていた結果であり、なぜそもそも桂について、このように詳しく論じられているかということ、桂は1880年代からOAGの会員であり、日本陸軍における、いわゆるドイツ派の中心的人物で、ドイツでもよく知られていた人物であったからでありましょう。

同じOAG会報のほかのページでも、OAGにとってまさに新しい時代が到来したことがわかります。会の活動報告の最初に、桂太郎以外にも、数人の重要な会員が亡くなったことが述べられています。桂太郎以外に、日本人の中心的な会員だった青木周蔵、名誉会員の元在日ドイツ公使の Holleben、ベルツ医師そして、長年OAGの会長を務めた Rudolf Lehmann。かれら全員が、1913年、1914年に亡くなっています。まさに、この時期に世代交代が急激に進みつつあったことを強く認識していたことが、この記事で読み取れます。

しかし、この中心的な会員の死よりも、その後の日独関係の悪化と日独戦争の勃発がOAGの運命を大きく左右させることになりました。1914年に、会報の編集方針を変更しようという動きと、OAGが新しい会規則を作成したことから、この時期にOAGは自分の役割を再確認しようという動きがあったことがわかります。しかし、日独戦争の勃発によって、会の存在そのものが危うくなってしまふことになります。当時のOAGの会員数は433人で、世界中にお

---

<sup>24</sup> Mitteilungen der OAG, Band 16, 1914, 1-6.

ける 200 の学術団体と雑誌交換を実施しており、OAGの図書館は1万冊の本を所蔵し、まさにOAGの最盛期にあったといえます。

募金活動によってお金を集め、新しいOAG会館を建てるところでしたが、この計画は日独戦争によって、棚上げするしかなくなりました。1914 年末、OAGはベーレント新会長が開戦前に執筆していた論説「ドイツ東洋文化研究協会の将来」を発表しました。この論説は、協会の出版活動がその後 1920 年代半ばまでの長い停止期間に入る直前に、いわば最後に出された刊行物のひとつでしたが、その時点では、そもそもOAGに将来があるのかさえ確信の無い状況で、協会は創立以来最大の危機に瀕していました。

## 第一次世界大戦の衝撃

ご周知のように、1914年とは、第一次世界大戦の勃発の年で、いわゆる「日独戦争」の始まりの年であります。「日独戦争」とは、現代人にはあまりなじみのないことばであります。これは1914年勃発する第一次世界大戦の東アジアの部分、すなわちTsingtao(青島)というドイツの植民地をめぐるドイツと日本陸海軍の戦いをさすことばであります。この日独戦争の影響で、OAGは大きな衝撃を受けました。日本の社団法人であったため、OAGは日本の官憲によって禁止はされませんでした。25その会員は「敵国貿易禁止」のため、財政的な困難に陥り、OAGの会費でさえ払えない状態に陥りました。なお、多くの在日ドイツ人がドイツの植民地のチンダオに移り、志願兵として日独戦争の戦いに参加し、結局ドイツ軍が降伏したあと、捕虜として日本に連れ戻されたわけがあります。

捕虜として、いうまでもなく会費を払えたわけではありませんが、この捕虜たちはそれにもかかわらず、戦後におけるOAGの再建の基本になりました。すなわち、かれらの多くは戦後も日本に残り、OAGの会員になりました。それは、戦中において、OAGの自由な会員が坂東などほかの収容所に行き、捕虜に日本の文化、日本語、中国語などを教え、彼らの日本、東アジアに対する親近感を促したからでした。このようなこともあって、OAGは戦後割合に早く再建の道を歩み始めました。しかしながら、そこでは、捕虜のみならず、戦争状態と関係なく、ドイツに対する強い親近感を持ち続けた日本人の応援も重要でありました。特に後藤新平はOAGのために働き、ドイツのソルフ大使とともに、OAGの再建に大きく貢献したのであります。

---

<sup>25</sup> OAGと異なり、日本の社団法人ではなかったKlub Germaniaは1917に(なってから)解散命令を受けました。

## 結びにかえて

OAGの創立趣旨、すなわち、日本に関する知識をドイツ、ヨーロッパに伝達する、という趣旨に基づいて刊行された『OAG会報』に浮上する在日ドイツ人の日本観は、どのように発展、変化したか、最後に簡単にまとめたいと思います。

1) まず、最初の特徴であるのは、OAGの日本への関心の重点が明治初期から明治後期、大正期までに大きく変化した点であります。明治初期の日本は2等国、3等国とみなされ、認識されていましたが、MOAGの紙面でも、日本は、むしろ帝国主義的な視点から、自然、文化人類学的研究の対象 となっていました。しかしこれに対して、明治後期、大正期の日本は世界の大国に発展していたので、伝統的文化、生活習慣よりも、時事的なテーマが取り上げられ、政治、経済、軍事に関する記事がOAG会報で数多く掲載されるようになります。この発展は第一次世界大戦によって一度断絶します。戦争によってOAGは財政困難に陥り、会報の刊行は非常に不定期になり、その内容の分析はしようがありません。

2) しかし、この関心重点がシフトするとはいえ、継続的にOAG会報とOAGから刊行された研究書で浮上する日本観は、しっかりした学術研究に基づく中立で学術的なイメージで、ドイツ本国とほかのヨーロッパ諸国で流行していたオリエンタリズム的なイメージではありませんでした。また、日本を美化し、日本の文化を「エキゾチック」なものとして紹介したり、逆に日本を「東アジアのドイツ」もしくは「東アジアのプロイセン」として紹介するような極端な

論文も、MOAGでは意外にも見つかりません。すでにこの時期から流行り、1930年代に著しく増加する日本とドイツの類似性論、その「国民性」における類似性に基づく自然的な国民的友情関係論というような言及もあまり見当たりません。プロイセンと日本の憲法を比較する論文のなかでさえ、日本とドイツの類似性よりも、その憲法における相違点の方が強調されています。<sup>26</sup>

面白いことに、OAGは自分の刊行物で、この学術的中立性を1930年代に再確認するわけであります。1939年に刊行された『明治ドイツ人の日本評価』という本では、このようにのべられています：

ドイツの日本年報で、ドイツと日本は類似していることを、よく主張しています。これは、その歴史的発展による偶然な発展のみならず、人間的な類似性まで（主張されています）。これには、わけがあるかどうか、ここで決めることが出来ません。ただし、ここで言えるのは、私が見た限りの明治ドイツ人の文献では、このような言及は一切見つかりませんでした。<sup>27</sup>

1939年とは、言うまでもなく日本とドイツが防共協定を結び、1940年の三国同盟に向かった年で、日本でもドイツでも日独関係の伝統的、自然的な友好性を批判し、当時両国におけるプロパガンダを台無しにするのが、難しい時代でありました。

---

<sup>26</sup> Dr. Ueberschaar: Preussisches und Japanisches Verfassungsrecht. Mitteilungen der OAG, Band 14, 1911-1913, Teil 2, 171-196.

<sup>27</sup> Adolf Freitag: Die Japaner im Urteil der Meiji-Deutschen. Mitteilungen der OAG, Band 31, Teil C. 1939.



図 8 : 1930 年代において日独伊同盟を提唱するプロパガンダ葉書

そのなか、OAGも結局、東アジアにおけるナチス党の普及に逆らうことが出来ずに、ナチスの「海外組織」に編入（Gleichschaltung）されたのですが、それにもかかわらず、一部の会員は批判的な態度を守り、日独関係の核心について、疑問をあらわし続けたのであります。

第一次世界大戦、日独戦争でも生き残り、ナチス支配と敗戦後のアメリカによる日本占領でも生き残り、OAGは今日まで東京、そして日本の地方でも 500

人の会員を数え、活躍をつづけています。今回、開かせていただいた展覧会では、この136年前に創立された会の業績を紹介し、その歴史的発展についても、さらに詳しく説明してありますので、どうぞ是非少しでも時間をとり、ごらんになって頂ければと存じます。

本日はご静聴ありがとうございました。